

2022年5月8日 家族の日(復活節第4主日)礼拝

メッセージ「命を捨てる」

水谷憲牧師

聖書 ヨハネによる福音書 10章 7-16節

心痛む出来事が多く起こっています。観光船の事故。楽しい旅行のはずだったのに、突然冷たい海に投げ出され、まだ行方もしれない方もおられます。山梨県では、山の中から子どものものと思われる骨や衣類が見つかり、約3年前に突然行方不明になった女の子ではないかと推測されています。そしてウクライナです。全く終わりが見えないどころか、明日の戦勝記念日に正式に戦争宣言をするのではないかとみられています。戦勝記念日とは、第2次世界大戦のナチスドイツとの戦いに勝ったことを記念する日なのですが、ドイツとの戦争、いわゆる「独ソ戦争」においては、ソ連の死者は3000万人(兵隊が1500万人、民間人も1500万人)と、日本が民間人合わせて310万人なのに対して桁違いの犠牲者の数です。戦争犯罪もものすごく、捕虜の虐待や略奪、強姦などもものすごかったようです。今も漏れ聞こえてくる虐殺やレイプなどの話から、年月は経っても人間のやることは何も変わっていないことを思い知らされます。

今日は「家族の日」、世間的には「母の日」と呼ばれる日です。事故の犠牲者にも家族が、母があります。行方不明の女の子のお母さんも家族も、苦しいことと思います。戦争に巻き込まれた人々、家族と離れ離れになり、家族を戦争によって奪われた人々がいます。そのいずれも、特に親の思いとしては「代われるものなら自分が代わってあげたい」でしょう。そんな、心を焼かれるような思いの中にある方々のことを思いながら、ひととき聖書の御声に耳を傾けてみたいと思います。

本日の聖書箇所9節で、イエスは「私は門である。私を通して入る者は救われ、また出入りして牧草を見つける」と言っています。羊である私たちは、イエス・キリストという門を通してこそ、牧草を見つけて安らぐことができるというわけです。この言葉、今キリストに連なっている私たちにとっては、まさにその通りではなかったでしょうか。私たちがイエス・キリストという門をくぐった時、私たちは死んだようなのちから生きる喜びに満ちあふれたいのちへと変えていただいた。私たちはみなそんな経験をしてきたのではなかったでしょうか。そしてその経験は、過去の一

回きりの思い出などではなく、私たちがイエス・キリストという門を通る度ごとに、私たちは暗い絶望の闇の淵からまばゆい希望の光のただ中へと移していただける。そのような「絶望から希望へ」といった体験、必ずしも今が絶望というわけでもなくとも、心が新たに希望で満たされるような、そんな経験を私たちはキリストという門を出入りするたびにしてきたし、また今もし続けているのではないのでしょうか。そして私たちがイエス・キリストという門をくぐる時、私たちは苦難の多いこの地上から永遠のいのちを与えていただける天上へも連れて行っていただける。もちろんこれはまだ私たちは経験していませんけども、私は確信しています。必ずそうなる。今日の聖書の箇所に関連して、旧約聖書の「申命記」28章1-6節を読みたいと思います。

「もし、あなたがあなたの神、主の御声によく聞き従い、今日わたしが命じる戒めをことごとく忠実に守るならば、あなたの神、主は、あなたを地上のあらゆる国民にはるかにまさったものとしてくださる。あなたがあなたの神、主の御声に聞き従うならば、これらの祝福はすべてあなたに臨み、実現するであろう。あなたは町にいても祝福され、野にいても祝福される。あなたの身から生まれる子も土地の実りも、家畜の産むもの、すなわち牛の子や羊の子も祝福され、籠もこね鉢も祝福される。あなたは入るときも祝福され、出て行くときも祝福される」

旧約聖書で神様が言われていたのには、もし私たちが神様のみ声に聞き従い、戒めを守って神様と共に歩むならば、その時私たちは、どこにいようと、入る時も出る時も大きく祝福されるというのです。しかし今日のキリストは、それよりもっと私たちの祝福のために踏み込んで下さっています。すなわち、私たちが神様のみ声に聞き従い、戒めをことごとく忠実に守ることができていなくても、羊の門であるキリストを通して入るだけで、私たちは死から生へと、絶望から希望へと救いあげられ、平安を、心の安らぎを与えていただけるのだと。なぜならその門であるキリストがこの世に来られたのは、私たち羊が命を得るため、豊かに得るためだからだということです。弱く、おびえやすい羊は自分に与えられた人生を喜んで生きることがしばしばできていない私たちと同じです。しかしキリストはそこに助け船を出して下さる。しおれてしまいそうなこの身体に、みずみずしい命をキリストは吹き込んでくださる。私はそのために来たのだから、とキリストは言っておられるんです。

今日は旧約聖書をもう一か所、詩篇23篇をご一緒に読みたいと思います。

【賛歌。ダビデの詩。】

主は羊飼ひ、わたしには何も欠けることがない。主はわたしを青草の原に休ませ／憩いの水のほとりに伴ひ／魂を生き返らせてくださる。主は御名にふさわしく／わたしを正しい道に導かれる。死の陰の谷を行くときも／わたしは災いを恐れない。あなたがわたしと共にいてくださる。あなたの鞭、あなたの杖／それがわたしを力づける。わたしを苦しめる者を前にしても／あなたはわたしに食卓を整えてくださる。わたしの頭に香油を注ぎ／わたしの杯を溢れさせてくださる。命のある限り／恵みと慈しみはいつもわたしを追う。主の家にわたしは帰り／生涯、そこにとどまるであろう。

今読んだ詩篇には、「主は私を青草の原に休ませ、憩いの水のほとりに伴ひ、魂を生き返らせて下さる。死の陰の谷を行く時も、私は災いを恐れない。あなたが私と共にいて下さる。あなたの鞭、あなたの杖、それが私を力づける」とありました。死の陰の谷を行く時、つまり死に直面するかというほどの逆境におかれても、私は災いを恐れない。あなたが私と共にいて下さるからだ。あなたの鞭、あなたの杖は私を力づけるのだと。ここにでてくる「鞭」というのは先に鉄の金具がついていて、狼などの野獣を羊の周りから追い払うために用いられたものだったといひます。鞭というと、私などは後ろめたいことが多いものですから、何だか自分がぶたれることをすぐに想像してしまふのですが、ここではそうではなく、神様が私たちに襲う邪悪な力から守ってくださるためのものであるわけですから。そして羊飼ひの「杖」は羊の数を数えるためにも用いられたといひます。神様はその杖でいつも私たちひとりひとりのことを数えながら見ていて下さるということです。羊飼ひの鞭と杖に象徴されるそんな神様は、あなたのこともちゃんと見ています。あなたのことも気にかけておられる。あなたのことも、あらゆる苦しみ、悲しみ、怒り、憎しみ、あらゆる邪悪から守って下さる。神様はそういうお方です。

そして、今日のヨハネ福音書。11節と14節には繰り返して「私はよい羊飼ひである」というイエスの言葉があります。イエスご自身で言っておられるものですから、一見するといかにも自信満々な言葉にも思えますが、これは決してイエスが自分を自慢して言っているわけではないでしょう。むしろそれは、イエスのキリストとして

の、羊飼いとしての決意の現れだったのではないのでしょうか。「羊に対して思い入れのない無責任な雇い人は、狼が来るのを見ると羊を置き去りにして逃げますが、私は自分の大事な羊のためなら命を捨ててもかまわない。それは、神様が私のことをいつもよく見て知っておられ、私のことを決して見捨てることはないということと同じことだ。私も自分を頼りにしてくれている羊を、どうして置き去りにできようか。囲いに入っておらず不安に迷っている他の羊もいるのに、自分を可愛がってなどおれない。」そのような思いで、イエスは「羊のために命を捨てる」と、これも2度繰り返して言うておられるのです。「羊のために命を捨てる」とは「どんなことがあっても、あなたを決して置き去りにはしない」「あなたのためなら命も捨てる」ということです。これは私たちにとって本当に大きな励ましであるとともに、大変重たい大事な言葉であると感じています。私たちは、このキリストの言葉を深く胸に刻んでおきたいと思っています。

この世のあらゆる宗教においては、愛が説かれています。しかし具体的に歴史上の出来事として、崇拜の対象である存在、この場合では神様が、その命を捨ててまで人を救いに導いた、それほどの愛というものは、このイエス・キリストの十字架の出来事以外にはない。私たちはそのことを誇りにして、「あなたのためなら命も捨てる」と言うてくださるキリストに、これからもまして全てを委ね、苦しい時にも一生懸命すがっていきたいと思います。